

Title	[翻訳] 史資料としてのウルドゥー語日記 : パキスタン独立時における鉄道局工員の記録
Author(s)	山根, 聡
Citation	大阪外国語大学論集. 36 p.91-p.111
Issue Date	2007-08-23
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80030
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

[翻訳] 史資料としてのウルドゥー語日記 —パキスタン独立時における鉄道局工員の記録—

訳・解説 山 根 聡

Japanese Translation of Urdu Diary by One Railway Engineer —as A Historical Document on the Independence of Pakistan—

YAMANE So

【解説】

本稿は、ゴーハル・ナウシャーヒー（Gohar Naushāhī）編のサイヤド・バシール・フサイン・ブハーリー（Saiyid Bashīr Husain Bukhārī, 1920–1987）の日記の翻訳である。この日記は、パキスタン独立 50 周年記念事業の一環として 1997 年に国立国語アカデミー（Muqtadira-e Qaumī Zabān）から『パキスタン建国に関するある勤労者の日記（*Qayām-e Pākistān par Ek Miḥnatkash kā Roznāmca*）』という題名で刊行された。

編者の序文によれば、著者ブハーリーは大学入学許可（metrik: matriculation）に合格後、職探しをしていたが、1946 年 11 月 14 日、鉄道局工場の勤務に就いた。住所はラーホール軍管区（chā'onī）のニシュタル街区（Nishtar Muḥalla）内で、日記に記された住所には、著者の第二夫人およびその子どもが 1997 年現在も住んでおり、この子どももパキスタン鉄道局に勤務している。著者本人は 1987 年に他界し、ラーホール市内に埋葬された。

本書では、1946 年 7 月 26 日から 48 年 8 月 30 日までの、パキスタン独立前後のラーホール市の状況を描いた部分が抽出されている。日記はほぼ毎日書かれたものだが、校定本が独立記念企画の出版であるがために、独立運動に直接関係のない部分が割愛され、独立直前である 1947 年 7 月、8 月の記述が多めになっている。この日記は、ラーホールの露天の古書商で校訂者によって発見されたもので、「北西鉄道（North Western Railway）」と記された用紙や、日本語で書かれた給与明細の裏に綴られている。筆者は、1995 年に、校訂者より本日記の現物の一部について照会を受け、日本語部分を確認したが、それは、厚手の台帳がごとき体裁の給与明細で、ひと月を 10 日毎に区切り、最後の部分にひと月の食料の配給分を記すようになっていた [Naushāhī, p. 8.]。

1947 年 8 月のインドとパキスタンによるイギリスからの独立については、わが国においても、[加賀谷・浜口 1977]、[中村 1977] [浜口 1983, 2000] [近藤治 1998] など、歴史学や政治学の手法によって多くの研究成果が発表されてきた。また [加賀谷 1961; 1963] は、ムスリム思想史の観点からパキスタン独立を解釈した先駆的な成果と位置づけ

られる。さらには、大阪外国語大学アジア研究会が編集した『1940年代アジア総合年表』における南アジア年表によって、分離独立前後の政治・経済的に主要な出来事が確認できる¹。年表については、最近ではパキスタンから、1700年から1947年までの詳細な歴史年表が刊行された[Aziz]。

分離独立時、インドとパキスタンへの住民の大移動が起こり、特にパンジャブ地方においてはヒンドゥーやムスリム、シークらによる宗教的な対立構造が激化、数十万人単位の犠牲者を出した²。この時期を描いた小説としては、[ラピエール 1977]が筆頭に挙げられるが、南アジアでは、この動乱を描いた文学作品がウルドゥーやヒンディーなどで数多く発表された。これら動乱を主題とした文学作品は、「動乱文学」と呼ばれることもある³。しかし、これら動乱文学作品については、宗教を超えた人間性を主題とし、宗教間対立を強調しないといった作為性が指摘されてきた⁴。他方、近年、動乱時に関するオーラル・ヒストリーが刊行されたり[ブターリア 2000]、反英武力闘争で絞首刑となったラーンプラサード・ビスミル(1897-1927)の自伝が翻訳紹介される[ビスミル 2007]など、分離独立期に関する調査研究が発表されるようになった。

インド・パキスタン分離独立という歴史的事件の起こった時代の社会状況や背景を理解する上で、その当時の大衆の記録は、たとえ記録者の主観が強く反映されているとしても、貴重な手がかりとなる可能性を十分に秘めていることは明らかである。本稿は、パキスタン独立時の史資料として、独立時ラーホールに居住していた鉄道局工員の日記を紹介し、当時の社会状況を明らかにすることで、ウルドゥー語による私文書の史資料としての可能性を模索することを目的としている。

日記中に出てくる地名のほとんどは、ラーホール軍管区内のもので、現フォートレス・スタジアム近郊の地域を指している。この日記では、独立直前の6月頃からラーホールで宗教間の対立が顕著となり、殺人や放火などが相次ぎだす緊迫した情勢となったことが描かれている。同時に、著者や、著者の同僚たちが、外出禁止令の発令中も、パキスタン独立日である8月14日の前日13日まで、鉄道局工場に通勤していたこともわかる。独立当日およびその後数日は勤務していないことがわかるが、いつ仕事を再開したかは明らかではない。ただし、本書では10月30日には恒常的に出勤しているかのように記されている。すなわち、制度としての鉄道局などは、パキスタン独立直後の混乱をはさんで、独立前の状態のまま引き継がれていた様子がわかる。さらに動乱の状況や、襲撃を恐れたムスリムが合言葉を打ち合わせていたなど、興味深い事実が見られる。ただし、これらの記述、もしくは「建国50周年」を謳った出版物としての編集作業が、動乱のすべてを描き出しているとは言い切れない点を忘れてはならない⁵。

また、国民会議派の動きに対し抗議の目的で服喪の行動をとったり、政治犯釈放などに際して祝う姿、あるいはデモで婚礼の行列を模したり、独立後のガーンディー暗殺に衷心から服喪するなど、庶民ならではの政治参画の様が見られる。同じバーザール内での殺人事件や、政治的な事件に対し、一斉に店を閉める行動は、南アジアでは現在も見られる動

きである。さまざまな政治的、社会的な事象に対する社会（庶民）の反応は、まさにこのような記録によって裏付けられるものである。また当時のラーホールでの祝祭日がイスラム聖者の命日や皇帝の誕生日、あるいは春を祝うバサントの祭りで休日になるなど、当時のラーホールでの社会について、種々の情報を提供している点でも、貴重な資料であるといえよう。今後は、このようなウルドゥー語資料のさらなる発見と紹介によって、南アジア史の一層の理解を深めたい。

【翻訳】

（注：文中の「…中略…」の箇所は、すべて原書において校訂者により省略された部分である。）

1946 年 8 月 16 日

本日全インド（Hindustān）のムスリムが不服従運動（Sivil Nā-farmānī⁶）の形で、インド全域でのストライキを行った⁷。市内全域で集会やデモが実施された。私も朝ラーホールに行った…中略…市内全域の馬車屋もストライキをしている。このため私もシャーフー・ガリー（Shāhū Garhī）迄徒歩で行かねばならなかった。そこからバスに乗って家に戻った。

1946 年 9 月 1 日

今日の雑誌（parca）『ザミーンダール Zamīndār』⁸に書いてあったが、2日にネルー政権が樹立される模様⁹で、その歓迎を黒旗（siyāh jhandiyān）¹⁰にて行うべきとあった。人々はそのとおりに実践した。私もこれに参加した。夕刻、食事をとってカーズィー^{ムハッラ}街区（Qāzī Muḥalla）に行った…中略…そこでは黒旗が配布されていた。そこで私は数枚の黒旗を貰った。私は大きな黒旗を持っていたが、そこに花輪もかけてやった。

1946 年 9 月 2 日

今日は9月2日だ。朝バーザールに出て見ると、すべて黒旗で埋め尽くされていた…中略…鉄道駅まで馬車で行く。そこからランデー・バーザール（Landē Bāzār）を通過してデリー門、そしてカシュミリー・バーザール（Kashmīrī Bāzār）、ディッビー・バーザール（Dibbī Bāzār）からカシーラーン・バーザール（Kasīrān Bāzār）を通過してまたデリー門を通過して戻ってきた。今日は町中一面に黒旗が見られる。そこから馬車に乗って中心（ṣadar）にやってきた。

1946 年 9 月 15 日

今朝水浴びをして食事をとり、仕事に出かけた。しかし、ムハンマド・フサイン（Muḥammad Ḥusain：人名）の店でマンズール（Manẓūr：人名）に出会ってしまった。彼は民族防衛隊（neshnal gārd：national guard）¹¹の用紙（fārm）を書き終えていたので、

私にも記入するように命じたのである。そこで私も躊躇することなく、民族防衛隊の用紙に記入した。今日は日曜で、2時半には会合に行かねばならなかったので、1時に仕事を終えた。帰宅し、食事をして2時半にマンズール、アフザル (Afzal: 人名) と会合に出かけた。3時を過ぎて話し合いが始まった。その後、外部から来た人物が、全員に棍棒やナイフの使い方について指導していた。その後パレードについても少し話があった。およそ6時に散会した。

1946年11月18日

今日、グラーム・アフマド公園 (Ghulām Aḥmad Pārḳ)¹² でムスリム連盟の集会があるとわかった…中略…ガリー・シャーフーでは鉄道局の労働者の集会があると聞いた。その後中心部に出て、ムスリム連盟の集会を聞いた。そこにはサイヤド・イマームッディーン・ビハーリー (Saiyid Imāmuddīn Bihārī) とイナーヤットウッラー (‘Ināyatullāh) 教授や、他の演説家たちの演説を聴いた。しかし、教授の演説が終わると、10時30分に帰宅した。

1947年1月24日

今日3時、ムスリム連盟の全指導者が逮捕され、夕方釈放された。しかし夜中の12時に彼らの自宅に捜索が入り、再度逮捕された。この日から運動が始まり、不服従運動も開始された¹³。

1947年1月26日

今日は休日だった。11時に町のシャー・ミーラーン (Shāh Mīrān) に出かけた…中略…途中、デリー門の外で群集が身柄を拘束されていた。中心部に行くと、そこでもミヤーン・ラフィーウッディーン (Miyān Rafī‘uddīn) の指揮下にあった群集が集まっていたが、警察はそこでは彼らを逮捕しなかった。彼らがムガルプーラに行くと、そこで警察は彼らを逮捕した。そしてジャッラーに行って〔群集を〕釈放して戻ってきた。群集は4時に戻ってきて、バーザール中や街区、小路を巡回して廻った。夕刻に散会していた。

1947年1月27日月曜 (バサント)

今日はバサントのため休日だった¹⁴。そこで朝起きて12時まであちこちを歩き回った。今日はラーホールのモーチー門 (Mocī Darwāza) の外で集会があった。それは、1947年1月24日に逮捕され、1947年1月26日に釈放された〔ムスリム連盟の〕指導者が開催したものだった¹⁵。集会後、壮麗なデモが行われた。そこでは、一人の男の顔が黒く塗られ、〔ムスリム連盟指導者を逮捕させたパンジャブ州首相〕ヒズル・ハヤート (Khizr Hayāt) を模した姿があった。もう一人の顔も黒くして、総督¹⁶ を模した姿が出されていた。

1947年1月31日

今日は5時30分に帰宅した。バーザールでは騒ぎが起こっていた。ラーホール〔中心部〕

からやってきた数名のならず者 (aubash) の一団が警察に逮捕され、バルキー (Barkī)¹⁷の方に向かっていった。私も[家の]外に出て、しばらくそこにいた。

1947年2月7日金曜

今日5時30分に仕事から戻り、食事をとった。夕方8時、バス (omnibus) や、警察のトラックにおよそ200人が乗っていると思しき8台のトラックが前を過ぎて行った。今日は雲がかかっていたので、そのとき雨が降り出した。今日は[慈悲の雨雲のように]自然と警察官の心に慈悲が訪れたのか、警察は逮捕者たちをたった11マイル離れたところで釈放した。それはラーホール軍管区からたった6マイルの場所だった。9時、警察のトラックは戻っていった。その後人々が戻り始めた。ある軍用トラックが二度にわたって人々を運んでおろした。そこでその路上に人々が集まった。空のバスが来るとそのバスを止め、人々を乗せていた。それからミヤーン・ラフィーウッディーンのトラックも[釈放地点に]向かい、残っていたすべての人々を連れ戻した。そして彼らを町に連れ戻した。今日はとても賑やかで、今は11時だ。

1947年2月8日

今日は預言者生誕祭 ('īd milādun-Nabī) の行進があったので、夕方8時にデモに参加した。3時間デモは続いた。その後11時にデモが終わり、帰宅した。今は11時15分を廻ったところである。

1947年2月9日

今日…中略…行進を見に出かけた。モーチー門からデモは始まり、デリー門を通してバーティー門 (Bhātī Darwāza), それからアナールカリ (Anārkalī) [バーザール] から[ラーホールの中心を貫く]マール通りに出た。5時に始まり、8時にマール通りのチャリング・クロス (Caring Krās) に着いたところで逮捕された。その中にはラーホール軍管区のムスリム警備隊の者も数名いた。

1947年2月10日月曜

今日は1時30分に家に戻った。帰宅すると、ここでは女性たちのデモが華やかに行われているとわかった。イスラーミーヤ学校 (Islāmīya Skūl) の男子学生たちのデモもあった。そのデモは、[パンジャープ州首相] ヒズルの邸宅に向かおうとしたが警察がこれを止めた。今日工場¹⁸でもデモがあった。[私は]バーザールに出かけた。そのときも[バーザールで]行進が花婿の行列 (barāt) のような形で出ている。数名は[花婿のように]馬に跨っていて、先頭では楽隊が演奏していた…中略…その後自動車 (moṭar) に乗って市内、モーチー門に向かった。そこに着いてわかったのは、昨夜、ベーダン通り (Bedan Rod) でデモが戻ってきていたとき、どこかの家から煉瓦数個が投げつけられ、これによって一名が負傷、メイヨー病院 (Meyo Haspatāl) に運ばれたが、夜1時に亡くなったら

しい。今日はその人物の葬儀が大学グラウンドで行われるという…中略…聞いたところでは、今日イスラーミーヤ・カレッジ (Islāmīya Kālej) の男子学生たちがラーホール高等裁判所の事務所にあるイギリス国旗を降ろして引き裂き、燃やした上で、ムスリム連盟の旗を掲げたという。旗は2時間掲げられていたとのこと¹⁹。

1947年2月11日

今日5時30分に仕事から戻った。あるデモが朝からバーザールをぐるぐる廻ってヒズル邸に向かおうとし、警察がこれを阻止しようとしていた。私も出かけたが、チャターイー橋 (catā'ī wālā pul) の上で合流し、ラール・カルティー (Lāl Kartī) を通りながらバーザールとサーガル通り (Sāgar Rod) を歩いてグージュラーン区内 (Aḥāṭa Gūjrān) に行って分散した。

1947年2月12日

今日は5時30分に帰宅した。そうこうしているうちにデモがやってきて、そのデモとともにバカル街区 (Bakar Muḥalla) まで行った。今日は、バルキー方面に逮捕者を連行して戻ってきたトラックがあったが、その〔トラックで連行された〕人たちが戻ってき始めた。

1947年2月21日

今日バーザールに行くと、^{ハラース}碾き臼街区 (Kharās Muḥalla) でデモに合流した。デモは歩き回り、帰路で警察署前を通ると、逮捕者用のトラックが警察署に止まっているとわかった。そこで長い間デモが続いていたが、しまいに軽罪判事 (majistret) の説得でデモは引き返した。今日はデモでかなり的大声でシュプレヒコールを叫んだので咳に悩まされている。

1947年2月24日

今日は「運動の日」が祝われた²⁰。すべてのバーザールはゼネストに入った。ラーホール市内では男女それぞれのデモが盛大に行われるなどした。ラーホール軍管区では女性たちのデモが出た。あるヒンドゥーがデモの写真を撮ろうとしたが、国家警備隊の男たちが彼を捕まえ、カメラを壊してフィルムを抜き出し、破棄した。

1947年2月26日

今日ムスリム連盟と政府の和解が成立した²¹。

1947年2月28日

今日47年2月28日は、〔ムスリム〕連盟と政府の間で合意ができてちょうど34日目である。運動中に逮捕されていた指導者全員は釈放された。公共保安条例 [Public Safety

Ordinance] は撤回された。

1947年3月2日

今日 [ムスリム] 連盟から、「勝利の日 (yaum-e fath)」²² を祝うとの発表があった。そこで家に戻るとナズル (Nadhr: 人名) とアービド (Ābid: 人名) の言うとおりに色とりどりの旗を切り取りだした。緑色の4枚の旗に白い月と星を切り取ってつけた。8時30分になっていた。夕方、たくさんの灯が灯された。

1947年3月3日

今朝仕事に向かうと、ヒズルが閣僚を辞任したとわかった²³。それで『時の声』^{ナワー・エ・ワクト}紙が出した号外 (zamīma) を読んだ。今日ミルザー・イブラーヒーム (Mirzā Ibrāhīm)²⁴ の仕事場 (shap) から私が出たとき、すべての工場がゼネストに入っていた。鉄道局発電所や格納庫でもゼネストになっていた。人はみな事務所の前に集まり、演説を行っていた。われわれはみな修理工場内を歩いてみたが、全工場がゼネストになっていた。12時に外に出て1時に番号を書きとめ、程なく帰宅した。ここでは人々が群れをなしてヒズルの屋敷に向かっていた。今日は誰も彼もが [ヒズルの] 屋敷に入る許可が下ったのである。私も出かけたが、すぐに戻ってきた。

1947年3月4日

今日12時に仕事を終えて一時間ほどで外に出ると、ミルザー氏の集会があった。その中で聞いたところでは、ラーホールでスィクに対し銃が発砲されたとのことである。少し前にストライキを巡って諍いが生じていたので、私は番号を記入して誰かに渡し、家に戻ったのである。帰宅して、本当に銃が発砲されたとわかった。自転車に乗ってバーザールに出た。帰り道、スィクとヒンドゥーのデモがジャッラー交差点を、スローガンを叫びながら過ぎていた。

「子どもたちが殺される、パキстанはできないだろう²⁵」

私はデモに並んだ。しかしデモは少し進んだところで病院の方に向かっていた。それで私が家に戻ろうとしていると、[デモは] 警察署の方に進んでいった。警官は警棒とピストルで武装し、デモの方に向かった。そしてドーグラーン区 (Aḥāṭa Dogrān) に行行ってデモを止めた。デモはサーガル通りを抜けて [スィク礼拝所の] グルドワラーに着いて終わった。しばらくして私はバーザールに出かけたが、『和解』^{ミラーフ}紙の号外を買った。帰宅して食事をとる。その間に、布告が出て、今日から都心部では戒厳令 (māshal lā) (外出禁止令 (kārfyū)) が発令され、夕方6時から朝7時までの間に屋外で見つかった者は、銃撃の標的となるとのことであつた。今晚は、すべてのムスリム [の住む] 街区では国家警備隊の連中が巡回している。

1947年3月5日

今日 12 時に昼食の休みに外に出ると、ラーホールでは大変な騒動が起こっているとわかった。それから、サダル・バーザールで発砲があったと聞いた。私はそのとき番号を取って家に戻った。調べてわかったのは、あるデモが一方からやってきて、街区に入り込もうとしたのだが、警官の拳銃を見て戻ったとのことである。その後わかったのは 4 時に大規模なデモが出るということである。警察は準備万端にして、4 時にデモが始まったのだが、警察の拳銃を見るやしばらく動き回った後、散り散りとなった。皆小路の端に立って見物していた。6 時に戻って食事をとり、またバーザールに行った。そしてバーザールの端に立った。あれこれ話をしていた。町からやってきたある男の口から、その男が自分の目で見た出来事を聞いた。男が言うには、とてつもない発砲がなされ、千人近く、いや、千人以上のヒンドゥーやスィークが殺された。その遺体は今トラックに載せられてどこか遠い場所に運ばれた。今 9 時になったところである。

1947 年 3 月 6 日 木曜

今朝 8 時に起床。顔や手を洗おうとしていた矢先に、突如として「来たぞ (ā ga'e)」という叫び声が沸き起こった。皆〔家の〕外に駆け出した。ミヤーン・ラフィーウッディーンの〔家族の〕女性たちがバザーズ街区のある家に住んでいて、主人が外に仕事に出ていたのだが、ヒンドゥーたちが彼女達を取り囲んだのである。彼女達を引き取るために、私が一人で向かった。ヒンドゥーたちがこれに攻撃を仕掛け、ムスリムたちに知られるところとなった。それで騒ぎが起こったのである。そうこうしているうちに警官がやってきて、全員を逮捕するよう命じた。中に入って、顔や手を洗い、チャーエを飲んだ。今日は警官がとても待ち遠しかった。バーザールを巡回するイギリス軍の兵士が呼ばれた。一日じゅう小路の端に立っていた。今日軍隊士官がやってきて、外出禁止令を発令した。夕方発令され、8 時以降何人も外出しないように、もし外出したら発砲されるとのことである。8 時 15 分に警察や白人 (gorā) 軍隊がすべての小路を巡回して過ぎていった。それからドラムプーラの方から 2 発、銃声があった。それから少しして、サダル・バーザールから一発銃声がした。

1947 年 3 月 7 日 金曜

今日は仕事に行かなかった。今日は休んだ。今夜ヒンドゥーが〔ムスリムを襲撃する〕十全な準備をしているという知らせがあった。そこで十分警戒して眠らなければならない。姉さんとアービドは今日屋敷で寝ている。今は 8 時 30 分だ。10 時 30 分にまたバカル街区の方からシュプレヒコールが高くなったが、警察が鎮圧した。

1947 年 3 月 8 日 土曜

今日ムスリムの会合があった。誰かが襲撃された場合、誰も騒ぐのではなく、特別な言葉「ボンベイー bamba'i」と 3 回呼ぶということが了承された。夕方 7 時 30 分にイギリス人軍隊のトラック 2 台と警察のトラック 1 台がドラムプーラ (Dharampura) に向かっ

て行った。一晩中警察の車が巡回していた。

1947年3月9日

今日秘密のピラ (parca) が出た。そこには、1万人のシクが諸州から11日に「反パキスタン」デー (yaum-e entī pākistān) を祝うために「ラーホールに」来ようとしていると書いてあった²⁶。

1947年3月10日

今朝仕事に向かい、「仕事場に」着くなり聞いたところでは、夜7時30分を過ぎたころ果物屋のアーシク (Āshig: 人名) が殺害されたという。6人が容疑者として逮捕された。今日バーザールは閉まっていて、バーザールでは再度当局から布告が出され、何人も棍棒やホッケーのスティック、武器を持ってバーザールを歩くことはできない、また夜間誰も叫び声を挙げてはならない、とのことであった。7時30分にユナス (Yunus: 人名) とメヘル・ドーガル (Mehr Dogar: 人名) がふれ回っていたところでは、今日は以前にも増して警察と軍隊が出動しており、皆安心して眠れるだろうとのことである。

1947年3月11日

今日はシクが大規模なデモ「反パキスタン」を行うと聞かされていたので、「仕事を」休んだ。あちこちで話を聞いて回ったが、どこにも、いかなる種類の騒動は見当たらなかった。今日は朝から雲が出ていた。涼しい風が吹いていた。時折にわか雨にもなっていた。

1947年3月12日

今日仕事が8時に始まり、昼食の休みは1時間の代わりに半時間だった。そして5時には終業となった。みな一緒に家路に着いた。帰宅すると、ザヒーラ夫人 (zāhira Begam) が家族全員とともにアムリトサルからここに来ているとわかった。家が焼けてしまったために、気の毒に5日間、家の外で、一体どこをどう歩いてきたのか、今日、着の身着のまま (sirf tan ke kapṛon ke sāth) ここにたどり着いた。今日ジャスワント・スィング (Jaswant Singh: 人名) の家の搜索があり、多くの武器 (銃弾、火薬) が押収された。そして2丁のヨーロッパ製拳銃も押収された。だがならず者のあん畜生、アクラム (Akram: 人名) は保釈金を払って釈放させたのである。

1947年3月19日

今日バーザールから『^{ザミーンダール}地主』紙の号外を買った。なぜならそこにジンナーの発表が掲載されていたからだ。家に戻って読み続ける。

1947年3月27日

今朝仕事に行くと、今朝鉄道修理工場の近くのムスリムを誰かが殺し、線路の上に寝か

せていたとわかった。

1947年3月29日

今日ドーンガル街区の数名のヒンドゥーが悪事を働き、警察が彼らを逮捕、連行した。さらに菓子屋ファテ・フサイン (Faṭh Ḥusain) の家に警察の捜索が入ったが、何も押収されなかった。8時50分に1台の公用車が通り過ぎたが立て続けに3発発砲した。その音は自転車のパンク音そのものだった。住民はみな驚いて外に出てきた。さまざまな噂が聞こえだしてきた。

1947年3月30日

今日は3月最後の日曜だった。いつも通り今日はメーラー・チラーガン (Mela Cīrāghān) [祭り] あるいはシャーラーマール (Shālāmār) [庭園] の祭りの日だ。しかし騒乱の危険性があるため、当局から [の指示で] 今回、祭りは中止となった。

1947年4月25日

今日聞いたところでは、ラーホール市街地で警察が学生たちに向けて発砲したとのこと、その理由は今もって明らかでない。それ以外に特に書き留めるべきことはなし。

1947年5月14日

今朝仕事に行って聞いたところでは、ラーホールで騒動が起こったとのこと。4時頃…中略…ラーホールでは24時間外出禁止令が発令された。このため、全員の休業が言い渡される。今日ラーホール市内ではかなりの騒乱となり、4時から24時間の外出禁止令が布告された。しかし外出禁止令にもかかわらず、騒乱は続いていた²⁷。

1947年5月15日

今朝仕事に向かった。ラーホールには外出禁止令が出ているため、今日の出勤者はとても少ない。

1947年5月16日

今朝仕事に行った。今日は昼食休憩が12時の代わりに1時になった。そして私は1時半に帰宅した。帰宅して聞いたら、ラーホールではかなり激しい騒乱が始まったという。今日ラーホールでは金曜礼拝の後激しい騒動が起こり、何発もの発砲がなされ、数え切れない家屋に火が放たれた。特にバーン・ブターン (Bān Butān) のバーザール、スリヤーン・ワラー・バーザール (Suriyān Wālā Bāzār), アクバリー市場 (Akbarī Mandī) は完全に破壊され、灰燼と化した。皆家屋が燃え盛るまま、外に飛び出たのである。鉄道駅にはあまりに多くの人が押し寄せ、身動きできない状態である。夜11時30分、突然騒ぎが起こり、喚声が聞こえた。敵が攻撃しにきたようであった。皆警戒した。この騒ぎはドラム

プーラから起こったように思える。

今日はバグバーンプーラ (Baghbānpura) での衝突が激しく、火も放たれた。今は10時である。

1947年5月19日

今日自転車で行った。入って聞いたところでは、バグバーンプーラのロコ (Loko)²⁸ の班長が殺害されたという。そこでは激しい騒動が起こっている。夕方聞いたところでは、周辺の避難民が大勢ラーホール軍管区におり、彼らのせいで衝突が起こっている。そしてダラムプーラの住人たちは自分たちが襲撃すると宣言した。このため、直ちに白人の軍隊が呼ばれ、彼らが巡回を行っている。

1947年5月22日

今日ミヤーン・ラフィーウッドの製粉場に警察と多くの人々が集まっていた。調べてみると、誰かが夜襲したらしい。そこで労働者に尋ねたところ、ラフィーウッドは自身が危険な状態にあり、警察の保護を得るべきだとの報告を出したという。そこで警察幹部たちがこの機会に見に来たのである。

1947年5月23日

今朝仕事に行った。その途中、工場の前で、アターリー (Aṭālī) から来ていた数名と、4人のスィクが何らかの理由で喧嘩した。スィクのうち2人は逃走したが、2人は剣を抜いた。程なく多くの人が集まった。そして彼ら〔スィク〕を捉えて工場の中に連れ込み、警察に突き出した。警察は彼らを警察署に連行した。その後人々の間に恐怖が広がった。そして人々は W. M.²⁹ の事務所の前に集まり、スィクに対し、工場内に剣を持ち国許可を与えるべきでないと主張した。この知らせで一層不安感が高まった。

1947年5月24日

今日はジョール・メーラー (Jor Mela) (祭り) のため休日。

1947年6月3日火曜

今日警察の公用車が訪れて、今日から11日間、サダル・バーザール (Ṣadar Bāzār) とボリス・ラインは〔夕方〕7時30分から朝6時まで外出禁止令が発令されたと発表した。今日ラジオで総督の演説があり、その後ネルー (Nehrū), ムハンマド・アリー・ジンナー (Muḥammad 'Alī Jinnāh), バルデーヴ・スィング (Bardev Singh) の演説もあった。8時を過ぎた頃、この3人ウルドゥー語で演説を行っていた。そして私たちは皆座って聞いていた。今は10時25分である。

1947年6月8日日曜

2時15分ごろ、ムガルプーラの方から続けざまに2発の爆発音が聞こえた。しばらくして、ムガルプーラ駅からマール倉庫にある別送荷物のうち〔のいずれか〕から爆弾2発が爆発したと判明した。

1947年6月9日

今朝仕事に行くと、ラーホール市街地のティッビー警察署管区 (Ṭibbī) は48時間の外出禁止令が出たとわかった。

1947年6月16 (11 ?)³⁰ 日

今朝、モーチー門で騒動が発生し、そこは60時間外出禁止令が出たと知る。

1947年6月12日木曜

今日は皇帝の誕生日³¹の休日だった。今日聞こえてきたのは、ラーホール鉄道駅の近辺のヒンドゥー避難民キャンプで爆弾が爆発し、警察がすぐに出勤、数名を逮捕して連行したとのことである。

1947年6月13日

今日、外出禁止令の期間が47年7月24日まで延長されたとわかった。そしてマザング (Mazang) [地区] では60時間の外出禁止令が発令された。

1947年6月16日月曜

今日は〔預言者ムハンマド昇天記念の祭〕シャベ・ミーラージ (Shab-e Mi'rāj) である。今日はバークバーンプーラで激しい衝突が起こった。たくさんの火が放たれた。

1947年6月17日

今日…中略…聞いたところでは、ドンガ街区のモスクに、誰かが爆弾1発を置いたか、投げ込んだらしい。その知らせが警察に伝わり、警察は白人の軍隊とともに来て、長い間作業を行った。軍隊の何人かが路上に立っていた。何人かは内部に入っていた。9時30分に皆立ち去った。

1947年6月19日

今朝仕事に行くと、ラーム横丁 (Rām Gali) から数名に対し爆弾1発が投げられ、これによって2名はその場で死亡、残りの2人は病院に搬送された後死亡した。その後騒乱が発生した。ラーム横丁とシャー・アーラミー門 (Shāh 'Ālamī Darwāza) の相当の家屋に火が放たれ、多くの人が殺された。

1947年6月21日土曜

今朝仕事に行った。1時15分に帰宅する。今日ヒンドゥーたちは野菜市場で1発か2発の爆弾を投げ込み、これによって数名が死亡、多数が負傷した。そしてその警察署長はスイクだった。彼もまた多くのムスリムを銃殺したので、その後ムスリムが[復讐を]始めた。[ムスリムは]そのスイクの警察署長をその場で殺害し、殺戮と略奪は激化し、多くの場所で火も放たれた。

1947年6月23日

今朝仕事に出かけた。本部から特殊な用紙が届き、班長2人も一緒に来たとわかった。彼は全員に対し、この用紙に記入させた。その中には、お前はパキスタンへ住みたいか、あるいはインドで仕事をしたいか (āyā tum Pākistān meṇ rahnā cāhte ho yā Hindustān meṇ kām karmā cāhte ho), と書いてあった。今日は一日中こういったことが続いた。およそほとんどのムスリムはパキスタンで仕事をする意志を示した。その中に私もいた。それから今日市街地の知らせでは、シャー・アーラミー門の集落で放火されたところは、昨日すなわち47年6月22日、1時間後に鎮火したという。それによって200件以上の家屋や店舗が破壊された。他にもいくつかの場所で火災が起こった。

1947年6月24日火曜

今朝仕事に行った。そこで、今日ダラムプーラの誰かが仕事に来ていないとわかった。今日ダラムプーラの警察は軍隊とともにチーチャ氏 (Cīca) [宅] を急襲し、そこからトラック4台分の武器を押収した。また現地産のワイアレスセットも押収された。それは直接デリート交信できるもので、ある女性を取り押さえたところ、乳房の下からピストルを押収したということである。ワイアレスセットをシュクルアッラー (Shukr Allah : 人名) 警察署長が試したところ、デリーから誰かが、「チーチャさん、何か武器が入用なら送りますよ」と喋った。

1947年6月25日

今朝仕事に行った。本部から爆弾2つと部品ひとつが押収されたと判明した。

1947年6月30日

今朝仕事に行った。今日私たちの工場から6人が希望者 (diza'iar) となった³²。4時45分に帰宅し、水を満たして水浴びし、外出した。人々から口伝えにわかったところでは、夜この街区に警察が急襲したという。その際、あるパーティー (その中には4人のメンバーとギヤーニー・ターラー・スィング (Giyānī Tārā Singh), そしてやくざ者ピヤーレー・ラール (Piyāre Lāl Bad-mu'āsh) も含まれていた) の容疑で逮捕した。今晚捜査する予定だったが、そのパーティーはすべての文書とともに拘束された。そしてラーホールのCIAに届けられた。その後バーブー・フィーローズ (Bābu Fīroz) が言うには、彼自身が『時の声』紙で呼んだところでは、一昨日、一人のスイクがムハンマド・アリー・ジン

ナーを襲撃しようとして屋敷の壁を飛び越えて〔敷地〕内に入ったが、襲撃する前に捕まったとのことである。

1947 年 7 月 1 日

今日は、バーダーミー公園 (Bādāmī Bāgh) にある何かの工場を警察が搜索し、そこから 200 以上のマシンガンや武器が押収されたという。

1947 年 7 月 8 日

今日 7 月 8 日からスィクによる不服従運動である。しかし警察と軍隊は相当の準備を行っているために、スィクは何もできないでいた。今日から外出禁止令の期限は 7 月 18 日まで延長された。そして〔外出禁止〕時間も変更された。すなわち、今日から外出禁止は〔夕方〕8 時から朝 6 時までになるらしい。

1947 年 7 月 10 日

今朝仕事に行った。12 時 15 分に〔出勤〕番号〔を記入する〕小屋に立っていたら、突如騒ぎを聞いた。誰かが爆弾を投げ、そのためにムスリムが怒ったという。そこで彼らは殺害を始めたのだ。修理工場前で 5 遺体が見つかり、電話によって、このうち一人が修理工場の者であると判明した。今日 3 時半を過ぎた頃、よくある程度の地震があった。その後 4 時 30 分に工場を出て 4 時 45 分に番号がやってきて、水を満たし、水浴びをして、外出した。シャフィーイ (Shafi' : 人名) からすべての状況が判明した。彼が言うには、12 時半、私は外に出ていたが、一軒のヒンドゥーの〔経営する〕ホテル (喫茶店) で爆弾の爆発音が聞こえ、すべてのムスリムがそちらに行き、多くのヒンドゥーとスィクを殺した。そして爆弾を爆破しようとしていた人物を取り押さえた。そうしているうちに S.M.W と W.M. やお偉方の士官や警官がやってきた。捜査の結果、彼が言うには、まだ 6 発の爆弾が店内に残っているという。そして 1 発はどこかの印刷屋の袋に入っていた。すべてを警察が押収した。工場の外にあった死体の総数は 30 近くになるという。今夕 10 時 15 分頃また軽い地震があった。

1947 年 7 月 11 日

今朝仕事には徒歩で行った。昨日の騒動のせいで軍隊や警察がたくさんいた。給料日だったので 3 時 30 分に給与〔支払い〕が始まり、4 時に給与を受け取り外に出た。

1947 年 7 月 16 日

今朝仕事に行くと、入口にはたくさんの兵士がいた。とにかく中に入ると、昨夜 7 月 15 日、修理工場の配給所 No. 2 の近くでどこかの班長が殺されたということだった。

1947 年 7 月 17 日

今日仕事に行くと、軍隊のトラックが2台、塞ぐように入口の前に停めてあった。そして装甲車や搬送車がやってきていた。調べたところ、夜ムガルプーラ警察署の近くでラーム・ジー（Rām Jī）という名のヒンドゥー請負業者が殺されたという。5時に帰宅する…中略…洗濯夫市場の近くで二人のスイクが労働者で溢れるトラックに爆弾を1発投げ込もうとしたが実行できず、逮捕されたという。

1947年7月20日

今日は聖ラマザーン月の初日である…中略…バークバンプーラの野菜市場で今日爆弾が1発投げ込まれ、これによって4人が死亡、数名が重傷を負った。ラームガル(Ramgarh)では爆弾が1発〔自ら〕爆発したが、何ら損失はなかった。

1947年7月21日

今日5時を過ぎてパーティー門の外のクラウン・シネマで映画が上映されていたが、爆弾が1発爆発した。これによって35人が死亡、100人以上が負傷した。今日は国境線画定委員会の会合の初日である。

1947年7月22日

今日仕事に行き、4時45分に帰宅した。その後聞いたところでは、5時にラーホールからアムリトサルに向かう列車があるが、それがムガルプーラ駅に停まったところ、何者かが爆弾を投げ込んだ。それがなぜかプラットフォームで爆発し、2人が死亡したという。内一人はラーホール軍管区のヒンドゥーだといい、もう一人はムスリムだという。犯人は逮捕され、その後、通勤用の電車にも爆弾が投げられたという。

1947年7月23日

今朝仕事に行った。しばらくして兵器工場（arḍinans: ordnance）の労働者をムガルプーラとハルバンスプーラ（Harbanspura）の間で運送していた列車が、線路上に何か〔障害物〕を置かれて停止させられ、特定不明の組織によって襲撃されたと聞かされる。これにより大勢が死亡し、さらに多くの人が負傷した。警察がすぐに到着したという。

1947年7月31日

今朝仕事に出た。今日は〔現在のインドとパキスタンの国境地点のパキスタン側となる〕ワージャー（Wāgāh）鉄道駅の近くに大勢のスイクが集まっていて、列車を止めようと準備しているとわかる。しかし何らかの方法で運転手の知るところとなり、運転手は自らの努力で列車を通過させた。

1947年8月11日

今朝仕事に出た。運河に着くと、ガンジ（Ganj）の方角に裸の遺体が水辺から出され

て置かれているのを見た。近づいてみると、その首の後ろには致命傷があった。後でわかったのだが、ラーホールでは騒乱が起きていたという³³。それで工場も休業となったのだ。今日はアムリトサル境界で大規模な騒乱が起き、人々は逃げ惑いながらやつのことでラーホールに着いている。困憊した人々は逃げるようにラーホールに来たのだ。その中にはラーホール軍管区に来た人もあって、彼らは小学校（prā'imarī skūl）に場所が与えられた。

1947年8月12日

今朝5時、突如として騒ぎが起こった。起きて見ると、バーザールでは大きな炎が上がっていた。その前に、誰かがゴーパールの店に放火しようとしたようだができなかった。バーザールの炎を見てそこまで行ってみたら、煙草屋のラブーラームの店が放火されていた。やがて炎は広がり、チャトゥル・スィング（Catur Singh：人名）の店まで、すべての店が焼け落ちてしまった。消火器4基が運ばれ、これが火の手を抑えた。その後6時30分に雨が降りだし、これが長い間降り続いたうえ、かなりの雨量となった。それから仕事に行こうと支度をしたが、数名が〔私を〕止めた。9時ごろムガルプーラ駅で騒乱が発生した。国家警備隊の任務についていた一人が負傷した。彼は病院に運ばれ、〔負傷した警備隊員の〕その代わりのムスリムの若者一人が、剣で6人のスィクを殺害、その後軍隊も到着した。軍隊は発砲もした。昨日は13人が死亡し、一日じゅう小路やバーザールを軍隊が巡回していた。

1947年8月13日

今朝仕事に向かった。今日は給料日だったので、徒歩で向かったが、そこで聞いたのは、ラーホールの労働者を乗せる列車の駅で、4人の非ムスリムが殺害されたという。その後12時までは平静だった。1時を廻って私が給与明細を持って勤務時間課³⁴に行ったところ、給料を受け取ったり、何気なく外出したスィクは殺害されているとのことだった。そうこうしているうちに作業場内でも騒乱が起きたと聞いた。私たちの作業場でも多くの非ムスリムが殺された。給与を受け取り、外に出た…中略…帰宅する…中略…その後聞いたのは、バーザールが放火されたとのことだった。外に出てみると、まさにその通りだった。ルテイー・ラーム（Rutī Rām：人名）の店が放火され、少しずつ8軒の店まで〔火は〕届いた。その間にゴーパール（Gopāl：人名）の店が3度も放火されようとしたが、成功しなかった。

1947年8月14日

今日は仕事に出なかった。休業となったのである。朝起きて水浴びをする。人々はゴーパールの店に放火しようとしていた。何度も試みたが成功しなかった。夕方近くになって、国境画定が秘密裏に判明し、「パキスタン」の国境はビヤース川（Biyās）まで設定されたという。製粉場で軍と警察の諍いが起こった。そうこうしていると駅の方角から銃声が聞こえた。私たちは逃げ出した。

夕方8時頃、バーザールで店舗数軒に火が放たれた。火事は4時間燃え続け、12軒が灰となった。その後ベンガーリー街区の1軒の店に火がつけられた。そこからは長い間銃声が聞こえていた。12時きっかり、今日パキスタン・ラジオが最初の番組を始め、1時2分まで続いた。今は15日の昼の12時である。

1947年8月15日 金曜日

今朝起きて水浴びをした…中略…あちこちをぶらついていて、全ての建物にパキスタンの旗がはためいていた。今日、軍隊に所属していたり、軍の用務に就いていたスイクがあちこちに駆け回り、うろついていて、多くの場所で軽機関銃（bren gan）でムスリムに対して発砲し、多くの損失を招いたと聞く。ラーホール軍管区では「ムスリムにとっての大切な」金曜は平穏に過ぎた。今日偉大な指導者ムハンマド・アリー・ジンナーがパキスタンの総督としての職務に就いた。夕方水浴びし、食事をとって屋敷に出かけ、ラジオを聞いていた。

今日、8月15日、パキスタンが出現した。夜12時に偉大な指導者ムハンマド・アリー・ジンナーがパキスタン総督として、パキスタンに関する責務を、インド総督マウンドバットン卿から自らの手に受けた。

神へ感謝を。

聖ラマザン月27日の8月15日金曜日。

1947年8月16日

今朝起きて水浴びをした…中略…一日中寝ていた。夕方外出すると、今日アムリトサルは完全に無人化させる命令が出たという。そしてバスがこの任務にあてがわれたという。

1947年8月17日

今朝起きて、食事をとった…中略…家で寝転がっていた。6時、『王の書』^{シャーナーメ}を読んでいたら、国境確定委員会の発表があったとわかったので、外出して調べてみると、本当に発表があったと知った。パキスタンとインド（Hindustān）の国境はワーガーの近くに定められたという。このため、アムリトサルはインド側に渡った。今夕まで天気は晴れていなかったため、[断食明けを示す] イードの月は見えなかった。9時、ラジオではラーホールの天気が悪くなかったために月が見えなかったと報じられた。一方、カルカッタ（Kalkatta）やハイダラーバード（Ḥaidarābād）、サッカル・ローヘリー（Sakkhar Rohri）では月が見えたという。11時にまた報せがあるという。11時、月「が見えた」との報せがあったので、翌朝はイードである。今は11時15分だ。

1947年8月18日

今日はイードだ…中略…一日中横になっていた。

1947年8月27日

今日ラーヴィー川 (Daryā-e Rāvi) で大規模な洪水があった。サトルジ (Satlj) [川] やビヤース川でも発生し、このためにグンダルナガル (Gundarnagar) の発電所は壊れてしまった。そのため停電し、バーザールや小路は明かりがないために活気がない。

1947年10月6日

今日…中略…窓ガラスをつけようと出かけたら、チャラン・スィング (Caran Singh : 人名) の店は放火されていた。

1947年10月15日

今日ラーホールではパキスタン軍の行進があった。

1947年10月30日

今朝仕事に出かけると、今日4時にジンナーの演説があるというので、1時30分に公休となった。だが私は12時に帰宅した…中略…4時30分にバーザールに出かけた。ジンナーの演説をラジオで聞いた。

1947年11月8日

今朝仕事に出かけた…中略…夕方…中略…新聞を読む。その後『王の書』の一部を読み、イクバルの『隊商の鈴の音』を読んでいた。

1948年1月30日

今日、マハートマー・ガンディー (Mahātmā Gāndhī) を誰かが銃殺したという新しい噂を聞いた。今は8時半である。

1948年1月31日

今朝仕事に行くと、昨日48年1月30日の4時過ぎ、マハートマー・ガンディーが似祈りの集会 (prarthana) に向かっていたところ、ピストルによる発砲で殺害されたと判明した³⁵。私が工場に行くと、今日はガンディーが殺害されたことへの哀しみに、[工場が] 閉まっているとわかり、帰宅した…中略…今日はガンディーのため、彼を哀悼して完全なストが行われ、バーザールは全て閉まっていた。

1948年2月9日

今日は2月9日だ。パキスタン政府から、今日から物乞いが非合法であるとの布告が出た。もし乞食が物乞いをしていて捕まると、326条27項に基づいて罰せられるとのことだ。今日、多くの乞食が物乞いをしていて逮捕され、警察は彼らを捕らえてラーホールに連行し

た。今夕、乞食が小路やバーザールで乞食しているところが一切見られなかった。

1948年2月16日

今朝仕事に出た。ミルザー・イブラーヒームがラーワルピンデイーで逮捕されたという。

1948年2月17日

今朝仕事に出ると、今日は終日ストライキだとわかった。そのため帰宅した。

1948年7月1日木曜

今日はパキスタン銀行開業のため休日だった。

本稿は、平成18年度大学教育の国際化推進プログラム（海外先進研究実践支援）「アジア諸民族の動態的考察に関する資源構築」（取り組み担当者：山根聡）および人間文化研究機構プログラム「イスラーム地域研究」京都大学拠点「イスラーム世界の国際組織の基礎研究」内「イスラーム中道派の研究」の成果である。

【参考文献】

- Aziz, K. K., 1997 *A Chronology of Muslim India 1700–1947*, Lahore: Ferozson's Limited.
——— 2001 *Muslim India 1800–1947 A Discriptive and Annotated Bibliography, Vol.1*, Lahore: Ferozson's Limited.
- 加賀谷寛 1961 「パキスタン国家形成におけるイスラムの役割」『東洋文化』29, pp. 71–98.
——— 1963 「インド・パキスタンにおけるムスリムの現代思想史(1)」『大阪外国語大学学報』31
- 加賀谷寛 浜口恒夫 1977 『南アジア現代史Ⅱ』山川出版社
- 黒崎 卓 子島 進 山根 聡 2004 『現代パキスタン分析』岩波書店
- 近藤 治 1998 『現代南アジア史研究 インド・パキスタン関係の原形と展開』世界思想社
- 長崎暢子 2004 『ガンディー時代』『新版世界各国史7 南アジア史』山川出版社
- 中村平治 1977 『南アジア現代史Ⅰ』山川出版社
- 萩田 博 1996 『アジア理解講座 1996年度第1期「ウルドゥー（パキスタン）文学を味わう」』国際交流基金アジアセンター
- 浜口恒夫 1983 「パキスタン運動における全インド・ムスリム連盟の国家構想と社会経済政策」『大阪外国語大学学報』第61号, pp. 225–250.
——— 2000 「ムスリム連盟の国家構想—パキスタン独立の前と後」『季刊 南アジア：構造・変動・ネットワーク』2巻1号 pp. 117–118.
- ビスミル, ラームブラサード 古賀勝郎訳 2007 『ラームブラサード・ビスミル自伝』（自費出版）
- ブターリア, ウルワシー 藤岡恵美子訳 2000 『沈黙の向こう側』明石書店
- メトカーフ, D. パーバラ・メトカーフ, R. トーマス 河野 肇訳 2006 『ケンブリッジ版世界各国史 インドの歴史』創土社
- 山根 聡 「動乱文学」『週刊朝日百科 インドの文学Ⅱ』朝日新聞社
- ラビエール, ドミニク・コリンズ, ラリー 杉辺利英訳 1977 『今夜、自由を—インド・パキスタンの独立』上・下, 早川書房

- 2 死者数は推定 50 万人から 100 万人 [加賀谷 浜口：172]、1951 年までに、インドから西パキスタンに移住した人の数は 650 万人（東パキスタンへは 70 万人）にのぼった [前掲書：172]。
- 3 萩田 1996 「動乱文学」『アジア理解講座 1996 年度第 1 期「ウルドゥー（パキスタン）文学を味わう」』国際交流基金アジアセンター、pp. 61–69.
山根「動乱文学」『週刊朝日百科 インドの文学Ⅱ』朝日新聞社
- 4 萩田、pp. 62–65.
- 5 たとえば、独立直後の 8 月 15 日の日記でも省略された箇所があるが、どんな部分が省略されたのか、といった点は明らかになっていない。
- 6 1931 年から 1934 年に展開された不服従運動を指すのではなく、校訂者が注で示したとおり、「直接行動」の意を指す。
- 7 ジンナーが、パキスタン獲得を目的に呼びかけたゼネストなどの「直接行動デー」が実施された。だがその結果、カルカッタで大虐殺が発生した [『1940 年代アジア総合年表』p. 170] ほか、ベンガル、ビハール、パンジャブでヒンドゥーとムスリムの紛争が激化した [長崎：421]。カルカッタでは 8 月 16 日から 20 日にかけてヒンドゥー、ムスリム合わせて約 4000 人が殺害され、数千人が負傷した [メトカーフ：310]。
- 8 ムスリム啓蒙運動を担ったアリーガル派のザファル・アリー・ハーンが 1911 年にラーホールから創刊した雑誌。
- 9 1946 年 7 月 29 日、ムスリム連盟評議会は、閣僚使節団案受諾を撤回し、「パキスタン」実現のための直接行動を決議 [加賀谷・浜口：22] した。その結果、妥協と合憲的方法によるインド問題の平和的解決の努力はすべて失敗し [前掲書：165] た。同年 9 月 2 日、国民会議派によって中間政府が樹立したが、ムスリム連盟はこの日を「服喪日 (yaum-e siyāh)」とすることを呼びかけた [Naushāhī：53]。なお、ムスリム連盟はその後 10 月 13 日に中間政府への入閣を決定した。
- 10 siyāh parcam (喪章) のこと。
- 11 ムスリム連盟民族防衛隊 (Muslim League National Guard) は、不服従運動 (Sivil Nāfarmānī 1931–34) 期に率先して参加した。ここでいう「民族 (national)」は、「ムスリム民族」の意。ラーホール軍管区には同隊長バーブー・タージュッディーン (Bābū Tājuddīn) がいたが、彼は鉄道局の工員だった [Naushāhī：53]。
- 12 ラーホール市内の公園で、パキスタン独立運動期、ムスリム連盟の集会が行われていた [Naushāhī：53]。
- 13 当時のパンジャブ首相ヒズル・ハヤート・ハーンは 1 月 23 日にウェーヴェル総督と会談し、翌 24 日、ムスリム連盟民族防衛隊およびヒンドゥーの民族義勇団 (RSS) を非合法化し、警察が防衛隊の本部を急襲、駆けつけた連盟指導者を逮捕した。これに対するムスリム連盟支持者の反発がパンジャブ各地に拡大し、指導者たちが逮捕された [Naushāhī：54；『1940 年代アジア総合年表』p. 171]。
- 14 バサント (basant) はヒンドゥー起源の春の祝祭で、喧嘩風を揚げることで知られる。現在もラーホールなどで春分の時期に開催されるが、風揚げでの事故による死傷者が出ることを理由に、パンジャブ州政府は風揚げを禁じている。
- 15 パンジャブ州政府は、ムスリム連盟指導者の釈放とともに、民族防衛隊および民族義勇団の非合法化を撤回した [『1940 年代アジア総合年表』p. 171]。
- 16 1943 年から 45 年まで州総督を勤めたエヴァン・ジェンキンス卿 [Naushāhī：55]。
- 17 ラーホールの郊外、現在のインドとの国境地点ワーガー近郊の町。
- 18 原語 kārkhāna。当時は小麦の製粉場もこう呼ばれた。ここでは、ミヤーン・ラフィーウッディーン所有の製粉場を指す [Naushāhī：56]。1940 年操業の製粉場で、ムスリム連盟の集会も開催された。
- 19 パンジャブ州では、ジンナー率いるムスリム連盟が選挙で勝利していたにもかかわらず、選挙で 10 議席しかとっていない連合党のヒズルが、国民会議派とシクのアカーリー・ダル (党) と連立して政権をとっていた。これに対しジンナーは異を唱え、不服従運動を展開、3 月にヒズ

- ルを辞任に追い込んだ。
- 20 1947年2月23日、パンジャブ州首相ヒズルはムスリム連盟指導者との合意に達し、政治犯全員の釈放を実施した。またデモに対する制限も撤廃された。これによりムスリム連盟は不服従運動をやめた。
- 21 パンジャブのムスリム連盟による不服従運動は撤回された [Aziz 1997: 377]。
- 22 ムスリム連盟指導者の釈放を祝うため。
- 23 ヒズル・パンジャブ州首相は3月2日に辞任した [Aziz: p. 378]。
- 24 ミルザー・イブラーヒーム (1905 生) は北インドでの労働運動の最初期の指導者として知られ、北西鉄道局の労働運動を指導した。
- 25 原文 “Bacca bacca kāt māregā, nahīṇ banegā Pākistān”
- 26 パンジャブ州での政争は、ヒンドゥーとムスリムではなく、シークの存在が大きかった。シークはパンジャブ州 (当時) で人口の13%を占め、パキスタンへの編入を拒否していた。しかし統一インド案が断念されると、分離独立に伴い「ヒンドゥー地域とムスリム地域」によって国境画定が進められ、シークの故地パンジャブが分断される結果を招いた。シークはパンジャブの分断に反対し、反パキスタン運動を展開した [メトカーフ: 312]。
- 27 同じ言葉を繰り返している。
- 28 鉄道局の略称。
- 29 略称不明。
- 30 このあと12, 13, 16日の日記が続くことから、11日の印刷ミスと考えられる。
- 31 イギリスのヴィクトリア女王のことか。
- 32 大阪外国語大学外国人招聘教員のムハンマド・ファハルルハク・ヌーリー博士 (Dr. Muḥammad Fakharul Haq Nūrī) によれば、この場合、「インドもしくはパキスタンのいずれかへの帰属の意志の表明ではないか」とのことである。
- 33 運河で流れ着いた遺体はその騒乱の犠牲者であろう、と推測している。
- 34 原語 ṭā'im āfis (time office)。文中随所に出る「番号記入」と合わせて考えるに、勤務時間の管理のため、労働者各自の番号を出勤・退社時に記録し、給与支払いの折に勤務時間を算出する制度があったのではないかと考えられる。
- 35 印パ分離独立後、ガンディーはインド・ムスリムの統一を力説し、ヒンドゥーの思い上がりを徹底的に批判する活動を取っており、会議派指導部や一部ヒンドゥーにとって厄介な存在であった [中村: 183]。

(2007. 4. 12 受理)